

Sさん

Aです。

連日の報道で、多くの方が国内、国外からヒロシマ、ナガサキの核廃絶への願いを託して参加されていることを見聞してきました。

Sさんも参加されたのですね！

戦後 65 年が過ぎ、高齢に達した被爆者の多くの方々は「残された時間」が少ないと感じ、それこそ命を削って、核廃絶の運動の列に参加されていることを、先日のTV報道での、ナガサキの被爆者の方の追跡記録映像であらためて実感しました。

名を失念しましたが、ニューヨークのデモンストレーションにも参加され、集会で報告され、バンギムン事務総長にも会われ、

今度は事務総長が長崎を訪れたときに、再び再会され、被爆者のメッセージを伝えられていた方がいました。

「原爆は多くの人々の命を救ったなどという人がいますが、そうじゃない。

原爆は多くの人々の命を奪ったのです。」 はっきりと言われていました。そういうシンプルなメッセージは強い力を持ちます。

朝日新聞には、国連事務総長は、広島でも、長崎でも韓国・朝鮮人の被爆者にも会い、慰霊碑にも足を運んだのに、自らの韓国人としての戦前の日本の帝国主義的支配への批判を封印して、一切そのことは口に出さずに、国連事務総長として、日本と世界の人々に核廃絶を訴えていたとのこと、これも深く胸に残ることです。

若い人々、そして子どもたちに平和の意味をどう伝えて行くのかは、古くて新しい課題です。

家庭の中でのコミュニケーション、地域での運動、諸市民団体の運動、学校での教育、メディアの情報の影響、等々の乱反射する言説、知識、誤報、デマ、等々の情報の中で

いかに自分の中に確信をもった羅針盤を築いていくか、これは大人も、子どもも共通の課題と思います。

僕は、長崎も、広島もそれぞれ原爆平和資料館に2度ほど足を運びました。

そして、沖縄の平和祈念館に立ち、京都の立命館大学の平和ミュージアムにも立ち、上田の戦没画学生の遺作を展示している無言館にも立ち、埼玉の丸木夫妻の原爆の図の丸木記念館、同じ丸木夫妻の絵を展示する沖縄の小さな美術館に足を運びました。訴えてくるものは、何だったのでしょうか。戦争の愚かさ、人の命の圧倒的な軽さの扱いへの憤りでした。

しかし、それは日本人が一方的な犠牲者であるという視点を生み出すものではありませんでし

た。長野県松代の大本営予定地跡の洞窟に高校生の案内で潜ったときに、壁にわずかに残された（カンテラの油で書かれた）「大邱（テグ）」の文字が、8月13日に日本の敗戦を確信して15日より前の13日に強制労働をさせられていた朝鮮人（韓国人）の人が書いた文字と聞いたときに、その人はそのときどんな気持ち（解放への希求）だったのだろうか、声も出ませんでした。

数年前に、中国のハルビン郊外にある日本の731部隊の実験施設跡に初めて行ったときにそのあまりにも生々しい「実験室」展示に、それまで読んでいた森村誠一作品などを超える迫真性がありました。そして、壁の展示に、大学の同学年の友人の手紙を発見したときはショックでした。彼は、高校教師として平和教育その他で熱心な方でした、しかし、父親の死の床に立ち会ったときに初めて父親が731部隊の兵士であったことを話したというのです。彼は、脳天をたたかれたようなショックで一体何を教えてきたのか、自分の父親のことも知らずにいたとは。そして、この731部隊の戦争博物館に謝罪の旅をしていると書いていたのです。名古屋の青年教育運動の助言者役をしていた頃に元気の良い青年がいました。その秘密の一端は何かと、彼女の高校教師を尋ねてみると、上記の友人の彼であったことなど、納得のいく思いでいただけに、そうかそのようなことがあったのかとしばらくその場を動けませんでした。

韓国の西大門刑務所跡にも行きましたが、その施設構造は、網走刑務所とまったく同じでした。そして、実に多くの人々が命を落としました。刑の執行の場所と死体を運び出す裏口のひんやりとした感触を思い出します。ここには、被害者にも加害者にも容赦なく人を変える戦争というものの、あるいは帝国主義的侵略の本質があります。

戦争反対の声や権力の横暴への抵抗の運動を知らずに、戦争の加害者に立つことは二度とあってはならないことです。ここで、思い出すのは、「ヒットラーの最後の12日間」という映画です。ヒットラー自身や、ドイツ帝国末期のシーンも興味あるものでしたが、その映画の脇役にヒットラーの若い秘書が出てきます。彼女は、戦後も戦争犯罪に問われなかったのですが（秘書として有能ではあったが、ドイツの戦争についてまったく無知な状態にさせられていた）、戦後になって、ミュンヘン大学のゾフィーショル（白バラは散らずの作品で著名）が、戦争に反対して処刑されていたことを全く知らずにいたことを恥じます。そのゾフィーが同じ年齢であったことにショックを受けて、初めてあの時代に向き合っていくことを決意したとの、本人のエピソードが最後に流れます。このようなことがあってはならないことです。

多くの子ども・若者と共に平和を考えましょう。